
ぎぶみーばれんたいん後輩

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぎぶみーばれんたいん後輩

【著者名】

コニ・タン

N9985K

【あらすじ】

【シリーズ物です。この話から読んでも意味が分かりません、そして初めから読んで意味が分からなくても苦情は受け付けません】妹とバレンタインと精霊の話。嘘は言つていなし、嘘は。

(前書き)

いやあ、一月十四日ですね！ ハツハツハ、この日のために温めていたバレンタインネタですよ！ さあ、とくと……

え？ 違う？

へ、へつへーんだ！ エイプリルフールでしたー！ 四月一日だもんねー！ やーいやーい騙され……

え？ 違う？

大変失礼致しました。元々は四月一日に投稿して「バレンタインですね！」と言い張るつもりだったバレンタインネタ、遅ればせながら投稿させて頂きます。変態抑え目となつておりますので、前二作を読んだ方はマイルドにお楽しみください。読んでいない方はとても意味が分からないと想いますので一作目から読むか、または理解を放棄して流し読むか、「適当に開いたら続き物かよ！ もういいよー」と进る感情をぶつけてお帰りください。
それでは、始めさせて頂きます。

バレンタイン……それは熱き男の戦い、主に近くで「ちりぢり」して

る奴らを笑顔でスルーする戦い！

バレンタイン……それは恋人の日々、いちやらぶしてんじやねー
よ蹴つ飛ばすぞ。

と、そんな事を去年は思っていたが今年は違う。

今年、俺にはあてが二つある。一人は変態ドM、葉山。もう一人は変態ドS、八雲京。これによつて貰えるのが「まるで本命であるかのように金と手間がかかった妹の義理チヨコ」一つだけという涙を誘う展開だけは免れたが、問題は奴らがまともにチヨコを渡してくれるかといつ事だ。

レツシシミュレーート！ 葉山がチヨコをくれると仮定して、それは果たしてどのような状況によるものなのか！

- 1、普通に渡す……だが中には痺れ薬とかが入つており、淫らへGO！ な展開に！
- 2、チヨコを渡そつとしたら落としちゃつたあ みたいな振りして足へ溶けたチヨコを… 舐められる展開に！
- 3、全身にチヨコ塗りたくつて「私を食・べ・て」というベッタベタな変態展開！

ふ、ふふふ……完璧だ。俺のシミュレーートは完璧だ。とりあえずあいつの性格からして1はまずないとして、2か3だな。2はまあとりあえず対応のしようがある、いつものあいつとそう変わらない。なので問題があるとしたら3だ……さあ来い！ 「私を食べて」などここは屈さんぞ！

當日

「たらふくチョコ」を食べてきたので、今私は頭のてっぺんから足の先まで全身これチョコの塊！ さあ、物理的に私を食べ・べ・て？」

「それは流石に予想外だわ」

閑話休題

ただいま2月14日。俺の家の二階には今日も今日とて不法侵入してきた葉山が居る。今日は休日で、奈緒と一緒にゆっくり過ごす予定だったのに。強化ガラスがいとも簡単に突破されてしまった。

「ふふふ、『窓ガラスをチョコレートにする魔法』、バレンタイン限定で成功」

感情を写さない瞳で口端をつり上げている八雲京のせいだ。怖えよ、お前は。

そんなこんなで、寝起きな俺の目の前には私服姿の二人が居る。葉山の私服は見慣れているけど（ちなみに劇的に意外な事に服は普通だつた。センスがいいというほどではないけど）、八雲京の見るのは初めてだ。まあ、ワンピースというやつなんですけれども。草原とかに居れば似合うかもしねないねうん。

「そんなこんなで、お前等はんな朝ひぱらからだいしたんだよ。」

「それは愚問というものの、先輩」

と、言葉を返したのは葉山と同じクラスに転入してきた、俺の事を先輩と呼ぶようになった八雲京。俺から魔王を引っ張りに来た刺客だったが、俺に惚れてそれはやめる事にしたらしい。しかもノリで転校してきたりしい。阿呆らしいが、葉山とはそれなりに上手くやれてるようで何よりだ。上手くやりすぎて現在こんな状況だけど。

さてはて、愚問と言われたがどうしたものか。やっぱチョコなんかチョコ渡しなのか。

「さあ先輩、葉山と以下同文」

「え……もちろん受け入れるつもりはなかつたけど、八雲京ちゃんも葉山ちゃんと同じつて珍しい……なんで痛みを受け入れる側に？」

「三倍返しこいつ行事があると聞いた」

なるほど、それはつまり俺に死ねという事か。

「とうわけで、愛と血肉を受け取つてください」

「以下同文」

これはヤバイ、新しすぎて誰もついてこれない展開だ。なんとかまともな思考に戻してあげないと、この一人にそもそもまともな思考があるのかどうかは置いといて。

「二人ともー そんな事しても俺に愛は伝わらないぜーー？」

「え、私は先輩に痛めつけでもらえれば大体満足ですけど」

「先輩に嫌がらせできれば半分以上満足」

ガツデム！ ここつらの愛は自分本位過ぎるのを忘れてた！ ぐくそぅ……一体どうすれば流血沙汰を免れるのだ！

「じー」

ちよつとだけ提案を受け入れて妥協させる……といついつもやつてるやり方は今回使えねえ。人肉なんて食えるか。

「じー」

びうじょひ、びうじょう！ ここで受け入れなければ今日一日ずっとこの調子だぞコイツラ！

「じー」

「……とにかく、叶山と八雲京は「いつの間にー？」みたいな」とりしき声を出してる君は誰なのかな？」

「はっ！？ 見つかったー わのれ、恐るべき慧眼ー！」

わからいでか。

とか思っていたが、葉山と八雲京は「いつの間にー？」みたいな動作で窓ガラスへと目を向けた。頼りにならねえなあ忍者と魔法使い！

「ふふふ、ふーつふつふつふつふつふー！ バレてしまつては仕方ない！ 私こそはってあれえネチャネチャするドロドロするダレカタスケテ！」

なんか窓ガラスから上がりこもうとしたらしいが、チョコ化ガラ

スに引っ掛けつて大分ドログチャになつていた。体中茶色くて、部屋に上がりこんだ今でもどんな奴かわからねえ。体のラインからして女だとは思つけど。

「……ホワイトチョコの方が良かつた、先輩？」

「君は俺を何だと思つてるのかな、八雲京ちゃん」

「そうですよ！ 先輩はそんな擬似的なもので興奮するほどレベルの低い方じゃありません！」

どうすれば葉山を苦しめることが出来るのか、そろそろ解説しないと。こいつにはたまにオシオキが必要だ。

そんなこんなで、不審者三号（この二人も十分不審者だからね！）はチョコを舐め取つたりなんやかんやして悪戯苦戦しながら立ち上がつた。

「わ、私こそは恋する乙女の味方！ 日本の製菓業界の罠であるバレンタインの日に告白しちゃう女の子を応援する為に具現した一月十四日の化身！ バレンタインさんだー！」

えー。

*

「なるほどなるほど、バレちゃんは精霊なんですね」

そんなわけで我が家シャワーを使ったバレンタインの化身もといバレちゃんは普通に俺の部屋に座つていた。四人も居ると手狭だ。こいつら遠慮という言葉を早く覚えればいいのに。

「おうよ、精靈さー。恋する乙女の味方だぜー、じゃんじやん咲白成功させるぜー」

そんなバレは、見た目はただの女の子だった。ていうか、無個性な女の子だった。目を離すとすぐにどんな姿か忘れてしまいそうなほど無個性だった。服装は包装でも象っているのかやたらとリボンな感じだったから、それで見分けられるのだが。で、精靈だつてよハハハ。魔王が居るんだからもうそんぐらい居てもいいよね。

「……恋する乙女といつのは、私たち？」

「ハッ！ まさか、まさかまさか今日こそ先輩に私の気持ちが届くのですかーー？」

で、バレに詰め寄る一人。もう発言内容とかは気にしないことにした。今の俺は客観的に物事を見る男だ。

「んー、いやー、私のレーダー」「ビンビン着てるのはお一人さんじやない。ていうか一人とも想には告げてるみたいだしな。私が応援するのは告白できずにじじいじもじもじしてるきやわいい女の子だけだゼー」

「想いを告げられずに……？」

「こじいじしてゐ……？」

一人がこつちに視線向けてきた。とりあえず首を横に振つて「俺じゃない」の意思表示。ていうか女の子でもなければチョコも渡さ

ねーよ。

でも、女の子？ 今、この家に一人以外の女の子って……ハツ！
まさか……くつ、迂闊だつた！ 僕が知らない間にそんな事態になつてゐるなんて！ 畜生オオオオオオ！

「ああっ、先輩が座つた状態から高速で立ち上がり駆け出した！」

「秒速20㍍……」

ドアを蹴り開け、辿り着いたのはダイニングキッチンな居間。そしてエプロンを着けた我が妹！

「誰だあああああ！ お前にはまだ早い！ お兄ちゃんは許しません！……」

「ひい、お兄ちゃん……！」

普段、あんまり怯えない奈緒が若干引いたような気はするが、きっと氣のせいだ。それよりも、この家に居るもう一人の女の子奈緒が誰かにチョコを上げて告白しようとしているだと！？ くつ、最近の子供は早いとは聞いていたが、まさかしばらく葉山にかまけてる間にこののような事態に！ まだだ、まだお前には早いんだ奈緒！

「せ、先輩……実はわりとシスコン……？」

「つむせええええええ！ 唯一の家族なんだよ！ なんかもう、超大事なのは仕方ないだろ！」

父母が居ない今、奈緒が居なくなつたら俺はどうすればいい！ あと数年で「妊娠しましたー、出来ちゃつた婚です」とかいつて

この家から出なくなつたらおれはどうすればいい！　ああ、畜生！

「まあ、そんな先輩も素敵だと思いますが……ていうか、奈緒ちゃんとは限らないのでは？」

「そ、そつかー、近くってだけで隣の家とかそういう可能性だって十分に「感じるゼー」」家の一階部分からビンビン感じるゼー」駄田だああああああああー！」

ぐおおおおおおおうー。」、「なれば……奴を、世田を成功させ
る精靈とやらを排除するー。

「バレンタインをぶつ飛ばせ、葉山ひやん、八雲原ひやん！ 俺が許可するつていうかお願ひにする。」

「えー、先輩、私たちは貴女の奴隸と言つわけではありませんよ?」
「以下同文」

「お前達はつぐづぐ俺にとつて都合の悪い存在だな！？」

葉山は「まあ、首輪と焼印のオプション付きで『雌豚』呼ばわりしてくれるなら奴隸になつても構いませんけど」などと言つてたが、さすがにそれは無理だ。

そういうつしている内に、ラッピングフルな「スロリバレンタイン」が一階へ降り立つた。

「お兄ちゃん……あの女は誰？」
「お兄ちゃんに付く悪い虫？害虫なの？」

「ああ、アイツは害虫だ……」の家を崩壊させる、悪い悪い奴だ…
…あんな奴は追い出さないといけないよ……」

ふつふつふ……奈緒も理解してくれたようだ。奴は我が幸せな家庭を崩壊させる悪一、劣悪！ 邪悪！ 滅びるべし！

「に、似たもの兄妹、……」

葉山の眩きは褒め言葉と受け取つておいつ。

「行くぞ奈緒！ 僕達の平和な日常の為に！」

「お兄ちゃん」と生きる未来の為に！』

奈緒が何故だか常にポケットに入れて持ち歩いているカッターナイフの刃を限界まで伸ばし、バレンタインに襲い掛かつた！ ふ、常日頃からうつかり刺殺撲殺毒殺必殺を極めかけている奈緒に敵うと思うなよこの泥棒猫の先駆け！

「む……ビビーベー！ 感じじるぜ感じるぜビンビン来てんぜ。
お前が恋する乙女だなあ」

香氣よのう、おうバレンタインよ！？ 一瞬後にはその身がズタズタになっている事も知らずになあ？ ふはははは、はつはははははは！

「よつすー。お前の恋を応援に来たバレンタインの化身だぜー」「お兄ちゃんこの人殺せない

「嘘おー！？」

奈緒がどんな動きか、今にも刺さりそうだったカッターナイフをしまって俺の方に向き直った。高速で。

「うう、何故だ！ どうして皆、俺のいう事を聞いてくれない！」

「奈緒！ どうしてだ！ そんなに好きな人と結ばれたいのか……お前には、俺が居るじゃないか！ せめて、後もう少し待ってくれよ……」

「駄目……私は、お兄ちゃんが大好きだから！ だから、誰にも盗られない内に……！」

「俺の事をそれだけ兄と認めてくれるなら、相手ぐらい教えてくれてもいいだろ！」

「お兄ちゃんが……おここちやんを愛してるのぉ……」

「だからそれは分かつたから！ 俺が聞いてるのは家族愛じゃないんだよ！」

奈緒も分からぬ奴だ……このままでは話が平行線だ。

「先輩……あそこまでいくと才能ですね」

「同感」

後輩ズがぶつぶつ言っているが、内容を気にしている場合では無い！

と、向き直った時　奈緒はバレンタインに後ろから抱きこまれる形となっていた。

「……まあ、うひーじー、お前らー。恋する乙女最終プランを発令するぜー。」

「これなり最終プランだとー? 意味が分からないー。」

「な、何イー! 恋する乙女最終プランどうー! ?」

「知つてこぬのか葉山ちゃん!」

「うむー……ではなく、はいー。あれは女の子の恋する力、乙女力を引き出してなんかバーッとなつて世界を滅ぼす要素となりえますー。」

「ほんと何も分からぬ! 何も分からぬけど世界が滅びるかもしれないそ、魔王とか曰じやないぐらいに意味わからぬ。」

「しかし、世界が崩壊するとなれば我々守護者協会の出番ー。」

「世界を破壊する要因を封じる事が使命……私はバイトだけど」

あ、そんな組織だつたんだ守護者協会。

「ど、とつあえず、うつうつ事なら何か知らんけど頼んだ二人ともー。」

僕の言葉が届くよりも早く、一人は飛び出した。先ほどの奈緒のように、殺意を持った攻撃がバレンタインを襲う。だがしかしこれも奈緒と同じように、二人の攻撃はバレンタインに届く事はなかつた。

一人の拳が、バレンタインの顔面ギリギリで止められていく。

「く……っ！ 私には、私には出来ません！ あんなに仲の良かつたバレちゃんを倒すなんて……！」

え、出会つて一時間も経つてませんけど。

「バレちゃん……春になつたら、一緒にピクニックに行くつて約束を……」

してたんですか、いつの間にしたんですかお前等！

「『めんなー、二人とも。これが私の使命なんだぜー』

対するバレンタインの顔も悲しげな微笑み、お前等いつの間に仲良くなつてるんだよ。

しかしこれはマズイ、一体どうすればいいんだろう。このままだと世界滅ぶぞ、もうどうせなら俺が滅ぼしてやろうか出でよ魔王ナポリターン、あつはつは。

「バレンタインさん……」

そんな混乱の中　　といふか混乱してるのは俺一人なのかそうなのか　口を開いたのは奈緒だった。自分を抱き締めているバレンタインを見上げ、怖いぐらい一心に見つめ続けて。

「私、一人でも思いを告げてみせます」

その一言が効いたのか。バレンタインは急に意氣消沈して、奈緒を抱き締めていた腕を解く。こうして、世界の危機は三分ぐらいで去つた。

「そつか、そうなのかー。私、要らない？ いらない子？」

「いいえ……あなたは、私の後押しをしてくれました」

それだけ呟いて、二人は離れる。何が何だか分からないが、二人の間でだけ通じる何かがあつたらしい。

「お兄ちゃん……あと何年か、絶対に彼女作らないでね」

「へ？ ああ、うん……あ、それがお前が誰かに告白しない条件なんだな？」

「うん……お兄ちゃん、「家族」を裏切らないよね？」

その時、何故か奈緒の瞳が三日月型に歪み小首を傾げたその顔の陰影が濃くなつたような気がするが氣のせいだろう。意味もなく端の方でお互いを抱き締めながら震えている後輩ズを無視し、頷きを返す。

「あと一年でお兄ちゃんを「分からせてあげれば」いいだけだよね

……

「ん、何か言ったか奈緒ー？」

「なんにもー」

むづ、俺には言えない女の子の事情と言つものがあるのだらうか。

「ふつふつふふふふふ！ めでたしめでたし万々歳の大団円だなー

！」

と、その時、ぶっちゃけ存在を忘れていたバレンタインが大きく声を上げた。見ると、その身体は透き通つて幽霊みたいになつている。ハツハツハ、今さらその程度では驚かない。

「バレちゃん……もう、行つてしまふんですね」

「おう、どうやら私を構成している力が戻きたよつだなー」

え、そんな動力源だったんだお前。

「バレちゃん……」

「ハ雲京、そんな顔するなよー。チヨコレートはバレンタインが過ぎたら溶けるのがサダメだぜー」

上手い事言つたつもりか。

「奈緒も頑張れよー。私に言つたからには絶対、いつか実現させるんだぜー？」

「うん……ありがとう、バレンタインさん……」

そしてバレンタインの姿はさらに薄くなつていぐ。これから消えるんだけど、その事を表すように。

「ありがとウ……ー」

奈緒の言葉を最後まで聞き届けたのかどうか　かくしてバレンタインは、光の粒子になつて消えた。

* * *

「わあ……出すの、久しぶり」

「だな。去年は出さなかつたからホコリが酷えや」

あの田からしづらく経ち、俺と奈緒は倉庫からあるモノを引っ張り出していた。ちなみに葉山ちゃんは「最近、私の影が薄い……？」とかメールしてきたけど来ませんでした。なんだつたんだアレ。で、出しているのは雛人形である。今日は三月三日なのだ。奈緒もまだまだこういう祝い事が必要な年頃だらうし、こうして俺が準備をしている。叔父さんはまだまだ帰つてこれそうにないし。

「よし、とりあえず適当に掃除してから並べるか」

「うん……」

しかし数年彼女は作るな、か……うん、葉山に対しての免罪符が出来て万々歳だ。

「じー」

いやまあ、葉山の事も嫌いじゃないしむしろ好きとか思いださないでもない今日この頃だが、家族の絆を断つてまでくつつきたいかというと全然そうではない。

「じー」

むしろ、現状維持が出来れば……といつのば、やっぱり甘い考え

なんだらうなあ。いつか、葉山と縁を切らなければいけない日がやつてくるのかもしれない。少なくとも、魔王つていうのがある分には大丈夫そうだけど。

「じー」

「ヒーリでせつきからわざとらしく覗いているのは誰だよー。」

「むひ、見つかったか！」

そうして扉の向こうから転がり出でてきたのは、特徴のない女だった。目鼻立ちも姿形も無個性な、ただ服装だけが派手な少女だった。十一単　　ああ、十一単だ。とても、オチが読めた。

「ふつふつふつふつふ！　バレてしまつては仕方ない！　私こそは小さな女の子の味方！　飾るのがめんどくせーなーとか思いつつも引っ張り出してくれた人々の為に祝いまくる三月三日の化身！　雛祭りさんだー！」

えー。

(後書き)

結局連載に纏めずに三作目、まあいいかと突っ走ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9985k/>

ぎぶみーばれんたいん後輩

2010年10月9日04時23分発行